

社会主義は現代資本主義のすべての窓からわれわれをながめている

一般に歴史では、とくに戦時には、一箇所に足ぶみをしていることはできない。前進するか、それとも後退するか、どちらかにしなければならない。共和制と民主主義を革命的な方法でたたかいとった二十世紀のロシアでは、社会主義にむかってすすまないでは、社会主義にむかって何歩かすすめないでは、前進することはできない（この何歩かは、技術と文化の水準によって制約され、規定される。農民の農業に大規模機械経営を「導入」することはできないが、砂糖生産では、それを廃止することはできない）。

もし前進をおそれるとすれば、それは、ケレンスキーらの諸君が、ミリュコフやプレハノフらを狂喜させながら、ツェレテリやチェルノフらの愚かな手助けをうけて、やっているように、後退することを意味する。

戦争は、独占資本主義の国家独占資本主義への転化を異常にはやめ、それによって、人類を社会主義にむかって、異常に近づけたが、これこそ歴史の弁証法である。

帝国主義戦争は、社会主義革命の前夜である。そしてこれは、戦争がその惨禍によってプロレタリアの蜂起を生みだすからだけではなく——もし社会主義が経済的に成熟していないならば、どのような蜂起も社会主義を生みだしはしないであろう——、国家独占資本主義が、社会主義のためのもっとも完全な物質的準備であり、社会主義の入口であり、それと社会主義と名づけられる一段のあいだにはどんな中間的段階もないような歴史の階段の一段であるからである。



わがエス・エルとメンシェヴィキは社会主義の問題を、空論的に、棒暗記したがよく理解できなかった教義の立場からとりあげている。彼らは、社会主義をなにか遠い先の、不明な、もうろうとした未来のことと考えている。

ところが社会主義は、いまや、現代資本主義のすべての窓からわれわれをながめている。社会主義は、この最新の資本主義にもとづく一步前進をなす一つ一つの重大な方策から、直接に、実践的に、うかびあがっている。

第 25 卷 P386~387『さしせまる破局、それとどうたたかうか』

1917年9月10~14日

ポイント

わがエス・エルとメンシェヴィキは社会主義の問題を、空論的に、棒暗記したがよく理解できなかった教義の立場からとりあげている。彼らは、社会主義をなにか遠い先の、不明な、もうろうとした未来のことと考えている。

ところが社会主義は、いまや、現代資本主義のすべての窓からわれわれをながめている。社会主義は、この最新の資本主義にもとづく一步前進をなす一つ一つの重大な方策から、直接に、実践的に、うかびあがっている。

コメント

社会主義を遠い未来のものとして語らない、語れないというのは修正主義者の論理だ。現代資本主義の矛盾を解決するための方策を追求するなかに社会主義への途がある。資本主義に対比して社会主義を提起しなければならない。